

「内科外来診療マニュアル」 第2版

市立札幌病院内分泌代謝内科副医長 吉岡 成人 編集

聖マリアンナ医科大学病院総合診療内科

生 坂 政 臣

熟練外科医の華麗なメスさばきや、一流の神経内科医の流れるような所見の取り方にある種の感動を覚えるように、よくトレーニングされた総合医が、多様な訴えを持つ外来患者を相手にインタビューと身体診察を自在に駆使して、短時間に的確な診断を下し、苦痛に満ちた患者の顔から安堵や笑顔を引き出していくさまは、まさに医療のアートである。

近年、わが国でも外来診療のための研修の必要性がようやく認識され始めてきたが、疾患の多様性、コストや時間の制約から要求される臨床判断学や社会的なマナーまで、すべて含めて一冊の本にするのはたやすいことではない。ましてそれらを凝縮させたマニュアルとなればなおさらである。その困難な仕事を、本書では卓越した一般内科外来医を執筆者に揃え、構成に工夫を加えることにより見事に成就させている。

まず外来診療の心構えに触れているが、月並みな序文ではなく、一般外来と救急外来との根本的な違いなどにも言及しており、一読の価値がある。また患者との接し方について、

熟練外来医でも陥りがちなピットフォールに枠組みで触れてあり、はつとさせられることも少なくない。

第1章は主訴から外来診療において考えるべき診断について、頻度の高い疾患を中心に上手にまとめてある。主訴も内科に限定せずに、腰背部痛、排尿障害、発疹、リンパ節腫大など外来診療においてよく遭遇するものが含まれており、また最初にオーダーすべき検査や専門医へ紹介するタイミングなど、外来ですぐに使える仕様となっている。更にこの章の優れたところは“TIAでは失神は起こらない”など、ともすれば曖昧にされがちな部分を明快に言い切っているところである。このような姿勢が全体に貫かれているため、通読しても気持ちがよい。

第2章は common diseases の診断と治療について、最新の内容が簡潔にまとめられている。治療薬は商品名を併記してあり治療薬マニュアルとしても使える。また臨床疫学の章も設けてあり、難しくなりがちな内容を、明快に解説してある。科学的な外来診療を行うためにも、ぜひ

目を通してほしい部分である。

第3章は健診で指摘された異常への対処の仕方について書いてあるが、まさに痒いところに手が届く内容となっており、一般外来診療にはこれ1冊で十分といった感ずらある。

そのほか、枠組みのサイドメモにも、“三叉神経痛に対するテグレトールは100 mg から始める”など、経験豊富な外来医ならではの診療のコツが惜しげもなく披露してある。また、Fitz-Hugh and Curtis 症候群や cough variant asthma など近年注目されている common diseases にもぬかりなく紙面を割いている。巻末の付録には、腫瘍マーカーの科学的な組み合わせや、小児の対症療法薬剂量などのほか、役に立つ情報が数多く取り入れられている。

多様な疾患を包括し、かつ即戦力となるポケットサイズの外来診療本として、極めて完成度の高い一冊である。

● B6変型 頁368 図24 表67
1999 定価(本体4,100円+税)
〒400

医学書院 刊(☎ 03-3817-5657)